

Title	リカルド分配論特に地代論の研究(一)
Sub Title	
Author	島, 文献
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1915
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.9, No.4 (1915. 4) ,p.463(99)- 472(108)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19150401-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る貯蓄に求むるに至らば、かの常に多額の資金を必要とする鐵道會社が此の間に立ちて果して幾何の資金を奪取し得るや興味ある問題なるべし。蓋し是等の會社は只供給せらる可き資金の一小部分を得んが爲めに一般金融市場に於て各國政府を相手として競争せざる可からざる地位に立つが故なり。

此と關聯して吾人の看過すべからざるは戦争の結果歐洲大部分に於ける投資々本の蓄積が全く中絶したる事實是なり。若戦争にして早く終結し交戦に従事せる人士が再び産業に従事するに至らば生産の回復に重大なる刺戟を興へ且つ貯蓄も亦大に増加すべしと雖も、他方に於ては白耳義及び北部佛蘭西其他敵國の蹂躪に委せられたる地方の織物其他の主たる工業を舊態に回復するには多少の時日と多大の費用を要するは又注意すべき處なり。

既に交戦列國は現状の下に借入れ得べき資金

佛國亦國防公債を一般公衆より募集したれども其金融市場に加へたる壓迫の程度は獨逸の如く甚しきものに非らざりき。英國に發行せられたるものは短期證券にして其の大部分は銀行の手に入りたるものなり。佛國に於て募集したる公債も亦四千五百萬弗を超ざるもの、如し。獨逸及び佛蘭西又或る程度に於ては英國に於ても政府の要したる軍事費は中央銀行が一部分其の紙幣を増發して之を政府に貸し上げたものなり。即ち獨、佛兩國に於ては開戦後直ちに中央銀行が多額の紙幣を増發することを認許し、且つ英國にありても英蘭銀行の紙幣に對する或る種の制限は多少緩和せられたる所あり。

を一般公衆より求むるに至れり。これ戦争當時政府の有したる資金は直ちに消費せられ、又は少なくとも他に資金を求めざるを得ざるに至りたる結果なり。獨逸は既に十億弗以上の公債を發行し、其の半額は既に拂込を終りたりと傳へらる。如何なる方法、形式によりて拂込をなしたるや其の詳細を知るを得ずと雖も多分大多數の應募者は帝國銀行其他特種の貸付銀行に就き自己所有の他の有價證券を擔保として以て拂込に要する資金を得たるものなる可し。

かかる手段方法は政府が資金を求むる上に於ては一時有効に行はる可しと雖も、而も此の方法を以てする時は公債は終極の投資家の間に適宜に分配せらるゝことなくして一時中間者の手に止まる可し。随つてかかる方法によりて拂込をなしたる有價證券は將來依然金融市場に對する負擔となるものと見ざる可からず。

是れ迄英國は六千萬磅の大藏省證券を發行し

リカルド分配論特に地代論の研究 (一)

島 文 獻

目 次

- 緒 論
- 一、リ氏分配論と價值論との關係
- 二、リ氏分配論と交換論との關係
- 三、リ氏の所得は所謂社會階級所得なり
- 本 論

總 論

- 第一章 リ氏地代論の叙述
- 第一節 地代の意義
- 第二節 地代の發生と其高低
- 第三節 獨占的地代一名絕對的地代
- 第四節 地代と價格
- 第五節 地代と農業の進歩改良

第二章 リ氏地代論の批評

第一節 地代の本質に關する批評

一、固有不可毀なる力に關して

二、土地使用料

第二節 地代の發生に關する批評

一、差額地代賦支指メ可キヤ

二、限界地の意義に關して

三、地代のみ無勞働所得なりヤ

四、所得は富の創出なりヤ

引用書

D. Ricardo, The principles of political Economy and Taxation. 1817.

An Essay on the influence of a low price of

corn on the profits of stock. 1814.

前書は「經濟原論」又は單に「原論」と略し後書は「影響」と略す

引用頁数はマツカロック版リカルド全集による。

緒 論

一、リ氏分配論と價值論との關係

リカルドは其著「經濟原論」第二章價值論に於て、價值の根本原則を考究し、相對價值は生産

以なり

福田先生著「經濟學講義」一六頁 K. Dahn, Sozialwissenschafliche Erläuterungen zu David Ricardo's Grundgesetzen der Volkswirtschaft und Besteuerung. I. 19; 100; 135 S.)

リカルドの一旦樹立したる勞働價值原則は土地私有制度發生し、地主か地代を要請する社會に於ても、果して何等の變化を蒙る事無く適用せらるゝものなりや。之れに對するリ氏の解答は「經濟原論」第二章地代論並に第三章鑛山地代論に於て與へらるゝものなり。而して第一章價值論第四節は固定資本の使用によりて受くる價值原則の變化を研究したるものにして併せて、利潤論の根據を爲すものなり。要之、リ氏の分配論は價值原則の運用論にして、彼の樹てたる原則の、進歩せる經濟生活に於ける適用の研究に在り。

リカルドにありては第一章第一節の劈頭に明言するか如く、價值の決定するは全く生産行程

に際し、消費せられたる勞働の相對量のみによりて決定せられ、勞働の報償として支拂はるゝ賃銀の多少に關係するものに非ざる事を續々説述する所あり。然れども此價值原則は、器具、機械、其他固定資本の蓄積起るに及びて、多少の變化と修正とを必要とせざるを得ず。而してリ氏の所謂勞働の相對量とは、現に消費せらる勞働のみを指示するものに非ず。過去勞働の蓄積たる資本をも包含するものなるを以て、彼の唱道する勞働價值原則は、資本制經濟社會に於ても牢固として動す可からざる妥當性を有するに至り、獨り野蠻未開の時代に適用あるのみならず、進歩せる社會に於ても亦同様の適用あるものなる事を知る可し。是れ、リ氏の勞働價值論は商品生産の社會にのみ適用あるマルクスの勞働價值論と異なる點にして、又土地私有無く資本の蓄積起らざる原始草昧の時代にのみ適用あるメミスの勞働價值原則と其趣を異にする所に於てし、分配の行程には毫末の交渉を有せざるものなり。リ氏分配論の全部に已に創設し増大せられたる價值か、如何にして生産關與者間に分配せらるゝかを研究するにあるものにしてリ氏は價值の生産は單獨に勞働行程に關聯するのみとなし、此以外價值付行程中にも價值の生産あるを認めざるものと云ふ可し。是れ聽て彼の利潤發生の説明(「原論」二五頁、六十八頁)は甚しく不明瞭不充分となりし所以にして、リカルドに於ては生産論と分配論とは截然たる區別を有するものなり。

二、リ氏分配論と交換論との關係

リ氏「經濟原論」第四章は自然價格、市場價格の考案に論じたるものと見る可し。リ氏の所謂自然價格とは、生産に消費せられたる勞働量を云ひ、市場價格とは實際市場に於て實現せらるゝ價格を云ふ。而して實際市場に於ては、需要供給の變動に因り、市場價格は消費せられたる

労働の相對量に關係なく決定せらるゝ事あるも之を以て一時的第二義的現象と見做し、結局は貨物は皆自然價格に合致せんとする傾向を有するものなる事の極力主張するものなり。即ち知るリカルドは價格決定原因を論究するに當り、主觀的要素及需給の關係の如きは盡く之を度外視し、只管純客觀的觀察を進め、價格の決定せらるゝは唯一生産費に因るものなりと結論するに至れり。(「原論」四七頁)

而して第五章賃銀論は實に此第四章に述たる理論の演繹にして、リ氏は労働力を以て自由に再生産し得る貨物と同一視し、賃銀を以て價格と見做したり。加之、賃銀にも自然、市場の兩價格の區別を設け、賃銀を支配する法則は又價格を支配する法則なりと斷定するものなり(「原論」五〇、五一頁)。

リカルドに従ふ時は市場價格の自然價と一致せざるは、需給の變動より來るものにして、茲

論を介して交換論に連結するものなれども、兩者共に分配論を補助するに止まり、彼の經濟理論の結構上分配論に比して其地位重要ならず。獨り分配を以て中心問題となすものなり。要するに生産行程、交換行程及分配行程は如何なる有機的關係に立つものなりやはリ氏の「原論」中説明する所なり又其編次粗雜にして氏の眞意を窺知すること容易の業にあらず。

リ氏分配の學說中地代論は特殊なる地位を有するものにして、地代の法則は、賃銀及利潤の支配するものとは全然別個のものたり(後に詳論す)。賃銀、利潤は價格の法則に支配せられ需供給の變動と其の歩調を共にするものなれども、地代は然らず。地代には自然價格と稱す可きものなく、又市場價格と見る可きもの無しと思惟せるなる可し。是れ應てリカルド「原論」に於て、地代論は價格論の前に置かれ、賃銀論利潤論は價格論の後に來れる所以を語りて余り

に於て彼の平均利潤の法則は破られ、資本は利潤底き企業より、高き企業に向て流るゝに至り資本に對する需給の平準得られて再び利潤率は均等するものなりと。即ち、市場價格に變動起り、從て利潤率に差違を生ずる時は、資本の移動を惹起するものなれども、一時的現象に過ぎずして、究局、價格は自然價格に歸着し、利潤は均等の傾向を有するものなりと説くを見る。故にリ氏は曰く、分配の法則を研究するに當りては、此等一切の一時的第二次的現象を度外視するも。學問上何等の妨無く單に自然價格、自然賃銀、自然利潤の考究を以て十分なりと爲し交換論とも目す可き「原論」第四章は自然價格論と化し、生産費價格論たるに終れり。(「原論」四七、六六、「影響」三七二、三八〇頁)

如上の説明により略明かとなりたる如く、リカルドの分配論は「原論」第一章價值論を通じて生産費に關聯し、第四章自然價格市場價格

あり、即ちリ氏は所得の二大項目たる賃銀、利潤を支配する法則は價格を支配する法則と同一なりと見做すものなり。然れどもこは表面的現象にして皮想の見たるを免れず。如何となれば價格は交換行程上の問題なるも、所得は分配行程上の問題たるなり。今數歩を譲り所得は價格なりと定義するも、價格を支配する法則の一度所得に適用せらるゝに際しては、甚しく制限せられたる意義を有するに至る事を忘る可からず。是れ所得の分配せらるゝ行程は、與へられたる社會制度に於てするものにして、抽象を許さず。現實の社會状態を離れては分配論は到底思考す可からざればなり。

現今經濟學の二大學說たる、限界利用派及マルクス派が共に分配論の正當なる認識に到達し得ざりしは、價值及價格現象の、分配現象に酷似せるものあるに眩惑せられ、深く問題の真相に透徹せざりし結果にして、此等學派に加へた

るトウガン・バラノスキーの非難は又リカルド一派の忍ばざる可からざる所たり。今ト氏に従ふ時は交換行程と分配行程と異なる諸點は、

一、價值判断及價格評價は個人を立點となし心理的なり。

分配は社會的行程なり、從て社會階級を前提とす。

二、價值判断は經濟生活上論理的範疇なり。分配行程は歴史的範疇なり。

三、交換論に於ては、平等なる個人を前提として價格決定せらる。

分配論は社會的不平等の前提として所得決せらる。

四、價格論に於ては、貨物個々の價格決定を以て目的となし、凡ての商品の價格の總和は何等經濟上重要な意義を有せず。

反之、分配論に於ては、個々の賃銀地代及利潤を以て最重の問題と爲すに非ずして各

所得の總計は問題となるものなり、換言すれば労働者、地主、及資本家の三階級に歸屬する所得の相關々係、即ち相互間の比例を論及するを以て目的となす (Michael Tugan-Baranovsky, Soziale Theorie der Verteilung, 1913, II S. 5.)。

リカルドは分配論全部を擧げて自然行程なりと目し、社會的行程なる事を看過したる事實は蔽ふ可くもなく、リ氏を捧する者と雖も亦承認せざる可からず。是れ偶々彼が自然權的思想の影響を受けたること甚しきものあるを證するものにしてリ氏分配論の全般に亘りて禍を爲すものなり、實にリ氏に於ては社會階級對立論あるも、階級戰爭論を發見すること難し。又彼は社會の進歩に伴ひて生ずる分配の不平均を認むるも、一に天然自然の大勢の然らしむる所なりとし、人の意思に關係なきを以て分配の不平均と稱す可からずと言明するに至れり。即ち分配

行程を以て純客觀的自然條件に歸依するものとなし、倫理的價值判断の對照となさざるものなり。(影響「三七八頁」)。

三、リ氏の所得は所謂社會階級所得なり。

リカルド「經濟原論」劈頭の序文を一讀する時は、何人もリ氏の分配に關する學説は大體二部に分れ、一半は經濟生活其物に對する靜的觀察にして、他の一半は經濟生活發展に對する動的觀察なるを看取し得可し。其靜動何れにしても彼の分配論の主體は階級所得の研究に存するものと見做すを得可く、「地球の表面より生ずる所産」か、其生産關與者たる労働者地主、及資本家に歸屬する行程を對象とするものなり。即ちリカルドは所得論を進むるに當り、社會階級を前提とし、各社會階級に歸屬する所得の比例的分配を以て分配論の骨子と爲すものなり(「原論」五、三二、頁)。

勿論、經濟社會の實際に於ては、階級所得は

所得の全部を網羅するものに非ず。資本を有し土地を所有し、且つ自ら耕作に従事する自作農及孤立せる手工業者の所得と雖も、所得たるに於ては階級所得と何等異なる所なきに不拘リ氏は此等の所得を全然度外視して顧みざるは、抑深き理由の存せずんばならず。考ふるに其故他無し、獨立生産者の所得は、例へ土地、資本及勞力の協同作用の結果産出せられたるものなりと雖も、其生産物は不可分なる一個の全體にして、其内幾何が労働によりて形成せられたりや幾何が土地生産力に起因す可きか、將た又資本充用の爲増大せられたる部分如何は、到底之を分離計算する事不可能にして、是れ所謂按分説 (Zurechnungstheorie) の共同に有する重大なる弱點となす。今暫く測定を可能なりと假定するも生産要素の生産に歸與し、貢獻するの度を論ずるは、生産論に於てす可く、移して以て直ちに分配論に適用せんと試むるは大なる早計たるを

免れず。生産要素たる土地、資本、労働を研究するは生産論の部門に於て論ず可く、分配論に於ては地主、資本家及労働者が問題となるものなり。切言すれば生産各要素の性質、作用を研究するものに非して、所得が生産關與者各階級に分割せらるゝに及びて、初めて分配の問題あり。然るに獨立生産者の所産は生産者一人の所得にして、他に分つ可き地主なく、労働者なく又資本家あるなし。従て社會階級の分化あり、對立ある社會を前提とするリ氏分配論の範圍内には、其地位を有せざるは固より當然の事と云ふ可し。

今暫くリカルドを離れ、他面より之れを觀察するも亦獨立生産者の所得は分配論中の問題とならざることを證明し得可し。如何となれば如斯所得は、經濟學中他の部門に於て詳細に究明せらる可き筈なればなり。其生産者の所有する生産要素は、生産論に於て盡され、其所得の大

小は其所産の分量の多少、品質の良否に因りて決定するものなり。即此種の所得は生産費と價格とによりて決定せられ、此以外に原因なし。而して生産物の價格の高低は、價格論に於て論述せらる可きものたるなり。勿論獨立生産者の所得の大小は、其所有する生産要素の多少に繋ること至て大なり。例ば廣大なる土地を私有し巨萬の富を擁する者の所得は従て大ならざるを得ず。然れども生産手段分配の状態、土地私有の發生及資本蓄積の由來は、即ち社會階級の分化を語るものにして、此れが根本的研究は經濟學の範圍に屬せず。其原因たる極めて複雑錯綜し、獨り經濟的原因に止まらず、社會的、政治的原因に職由すること大なるものとす。吾人は具體的に與へられたる社會關係に於て、行論するものなるが故に、生産手段の分配及社會階級の分化を前提とするものなり。従而此の點に關しては、リ氏の分配はよく這箇の理に通じたる

ものとして全部之れを認容せざる可からず。

リカルドは自作農及獨立手工業者の所得を分配論中より除外したる理由に就ては之れを言明せざるも、其眞意の何邊に存するやは蓋し推知するに難からず。十九世紀初葉のリ氏の時代は英國の産業は、將に革命の轉機に際會したるの時にして、資本制生産益々勃興し、加ふるに英佛大戦争の後を受けて、農産物の價格暴騰し、他方に於ては、地主階級議會に勢力を得て穀物保護條例の續發せらるゝものありき。其結果英國内に於て穀價は非常なる騰貴を來し、耕作地は増加して劣等地の耕作を必要とするに至りて地代之れと共に上昇し、其利益は獨り地主階級の壟斷する所となれり。又之より少しく以前に當り、佛國革命の勃發するありて、社會階級の觀念大に促進せられ、階級的利害は到底一致するものに非して、社會の進展と共に愈々其利害背反の程度を増すものゝ如き狀を呈するに至れり。

り。即ち、一階級の所得の高低は直ちに他階級の所得に影響し相互に密接なる關係を有するものなること明かとなれり。此事實を目標し救済を企圖せる彼は、社會階級間の比例的分配を以て、分配論の骨子と認め、否、經濟學最重の問題と思惟するに至れるは誠に當然と云ふ可し。當時英國上下の視聽を集めたる時事問題と、リ氏分配論との關係に論及せるキヤナンの言肯綮に當るものあれば左に之れを摘録せん。

「穀物條例反對の論據は、リカルド分配論に如くものなかる可し。穀物條例によりて生ずる利害の衝突は、個人間に非して階級間なり。或一階級の民衆に對する問題に非ず。換言すれば富者の貧者に對する問題に非して、地主階級の商工業階級に對する問題なり。リ氏が個人間の分配論を闕却せるは、此場合に於て何等の妨なし」云。(Cannan, Theories of production and Distribution, 391 P.)

リ氏の到達したる結論の當否は暫く之れを措く。分配論の範圍を以て、地代、賃銀及利潤の三社會階級所得に限定し、其比例的な研究を以て分配論の本體と爲したることは彼が空前の創見にして、其識見の時流を抜くこと大なるを證するに足る可し。實に、リカルド一度出で、我經濟學は初めて Wages per head, Profit percent, Rent per Acre 以外更に重要な比例的分配の存することを知れり(キヤナン前掲書三三九頁)リ氏の所論は客觀的抽象的に論じ、勞働價值原より續釋して分配行程に及びたる結果、實際事實の説明に欠陥ありとの非難は辭す可からざる所なれども、今日の分配論に於て取扱はるゝ所のもの、多くは彼れの與へたる問題と其範圍とを出でず(續經濟學講義二〇頁、アール前掲書第二卷五〇六頁)

批評と紹介

The Nation's Wealth Will it endure ?

By L. G. Chiozza Money

千九百十四年 倫敦 發行
小形二百六十四頁東京價五十圓

歐洲大混戦の初期に於て獨逸が其西討東伐の軍略に失敗して以來同盟側並に協商側は共に持久の策を講じつゝあるもの如くなるが、若し果して然りとせば各交戦國の富力は戦争の結局に一大影響を及ぼすものなりと云はざる可からず。本書は交戦國中に於て最も富めりとの評ある英本國の富力に關する綿密なる統計的研究を載せたり。著者が本書の稿を了りて上梓せるは昨年春期にして従つて著者の見地は今次の大戦亂とは没交渉なるも、著者の引用する統計數は戦争に對する英國の耐久力如何を知らんと欲する者の參考に資する所尠からず。

本書其物の目的は英國の富の基礎甚だ薄弱なる所以を説きて國民を覺醒せんとするに在り。著者論旨の要點は左の如し「英國が巨大の富を生産し之を蓄積するに至りしは近代の、

となり。百五十年前には人口比較的に稀薄にして、富の産出操はざりしが、十八世紀の後半に於て製鐵事業に石炭を應用するに至りてより英國は俄然富國となれり。千九百七年に於て英國は一ヶ年に約十一億二千二百萬磅の富を産出せり(人口一人當り二十五磅)此數字は單に貨物の生産額の原價のみを含むものなるが故に、國民の収入は勿論是れ以上に上れり。此等の貨物の生産並に勤勞等より生ずる總ての収入は千九百八年に於て約十八億四千四百萬磅に上りたるが、千九百十四年には多分二十一億磅に達するならん。又一方千九百十四年に於ける富の總額は百二十億磅に上るならん。是れは土地及び有形資本の價格に非ずして其生産力を基礎として算出せる見込價格なりとす。此外英植民地に投資せる額は十七億八千萬磅にして、其他諸外國に投資せる額は十九億三千五百萬磅なり。共に千九百十三年の統計)而して一ヶ年の富の蓄積は三億磅ならんと思はる。

此巨額の富の産出は永遠に持續せらる可きか。今英國が大富國と爲りたる原因を尋ねるに、其原因が農作物にも非ず鐵物にも非ず、綿織物毛織物の原料にも非ずして、實に工業用の燃料たる石炭に在るを知るなり。千八百七十五年迄は英國は世界に於ける石炭の全産額の約一半を年々産出せり。然るに千八百八十五年には英國の産出額は世界全産額の四割に

下り、同九十五年には三割三分となり、今や僅かに其二割五分を出すに過ぎず。千八百七十五年に於ける英國の産額は合衆國並に獨逸産額の合計よりも遙かに多量なりしが、千九百十一年に於ては英米其位置を轉倒して米の産額は遙かに英國の上に在り。加之、今日の供給率にして維持せられんか、英國の炭礦は約百七十五年後に空虚となるに至る可し。若し果して然らば、英國々富の將來は暗澹たるものなりと謂はざる可からず。石炭は現今に於ける富の大量生産に不可欠の要素なるを以て、假りに一世紀半後に於て石炭の供給杜絶するとせば、英國は再び一世紀半前の如く貧國とならざるを得ず。

現代の國民は一世紀半後に現出す可き此状態に對して豫じめ備ふる所なかる可からず。動力調査委員會を起して石炭の節約を奨励せしむるは其一策なり。公債を償却して未來の國民の負擔を軽減するは是れ又現代の國民の義務なりとす。又將來石炭に代る可き動力の發見又は發明せられたる曉に於て英國民をして他國民との競争に堪へしむる爲めに教育を益々普及するの要あり。云々。

K. Asakawa: The Origin of the Feudal Land Tenure in Japan, (Reprinted from the American Economic Review, Oct. 1911)

西洋とはまだ交通の開けなかつたその昔、我が國で恰も泰